

幼稚園教育実習指導における遠隔交流の活用に関する検討

真下 知子・小林 君江

2年制の保育者養成課程における幼稚園教育実習の事前学習として、幼稚園とのオンライン交流を継続的に実施し、その教育効果に関する検討を重ねている。2023年度は、交流後に、学生自身が保育を行う上で工夫したい点は何か、また、それは交流時の何に着目したことによるのか、交流時の着眼点に重きをおいた調査を行った。また、担当した幼稚園教諭2名を対象に事後インタビューを実施した。これらの結果より、対面と遠隔を組み合わせ新たな実習指導への示唆が得られた。

キーワード：幼稚園教育実習指導、事前学習、オンライン交流、ICT

1. はじめに

2年制の保育者養成課程において、毎年1年生を対象に、幼稚園教育実習の事前学習として、オンラインによる園児と学生との交流を行っている（以下、遠隔交流とする）。本実践は、コロナ禍での代替手段として2021年度に始まったものであるが、その後も継続的に実践し、調査・分析を行っている。2022年度の調査からは、対面での見学と比較して、様々な制限がある中でも、学生は多面的に子どもや指導者の行動を観察し、指導者に必要な資質や今後、自身が身に付けるべき知識や技術について、具体的な視点を見出していることが明らかとなった（真下・小林、2023）。

教職課程の学生と園や学校との遠隔交流に関しては、数少ないがいくつかの参考となる先行研究がある。Kim（2020）は園児と保護者、個々の学生をつなぎ、学生が子どもたちに対して保育を実践する中で、子どもの反応を通して保育技術の改善につながる気づきが得られたことや学生同士の学び合いが促進されたことを報告している。また、川口・徳岡（2021）は、学生と認定こども園の園児との交流を通して、学生の

保育・教職に関するポジティブな意識変容があったことを示している。岸ら（2021）は、教職課程の学生が小学校の授業参観と交流をオンラインで行い、子どもたちとの関わりに十分な臨場感が得られたことを示している。これらは、いずれもコロナ禍での試行的な実践であるが、様々な利点があると考えられ、その教育効果について、さらに検討を行うことで、今後の活用可能性を広げていくことができると考える。そこで、筆者らは2023年度の実践においては、学生自身が保育を行う上で工夫したい点、また、それは交流時の何に着目したことによるのか、着眼点に重きをおいた調査を行った。さらに、交流を担当した幼稚園教諭2名を対象に、園児の反応、今後の継続的な交流についてインタビューを実施した。これらの結果を踏まえて、本稿では本実践の効果や課題について考察するとともに、今後の実習指導への活用可能性について述べる。

2. 遠隔交流の内容・方法

- (1) 実施時期：2023年10月
- (2) 実施方法：1年生後期、教育実習総論Ⅰの第

3 回目に教育実習事前学習として実施

(3) 参加者

短期大学：幼児教育学科1年生、68名、
 授業担当教員2名（2クラスに分かれて実施）
 幼稚園（京都府の私立幼稚園）：5歳児60名、幼
 稚園教諭2名

(4) 接続方法・時間

Google Meetにより約30分間接続した。大学の
 教室は広角、幼稚園の保育室は標準のウェブカ
 メラ各1台を用いて、参加者全員が映るように
 設定した。

(5) 授業の流れ（90分×2クラス）

- ①事前説明・確認・リハーサル（約35分）
 - ②園児と学生の交流（ライブ約30分）
 - ・クラス紹介（ドキュメンテーション含む）
 - ・学生の発表（手遊び、クイズ、ダンス等）
 ※第2回目に5歳児を対象とした遊びを6グルー
 プで発表し、代表4グループを選抜した。
 - ・園児からの歌
 - ③担任教諭から学生へのメッセージ（5分）
 - ④事後アンケートの説明・記入（20分）
- 発表の準備と遠隔交流時の様子を図1～3に
 示す。



図2 準備の様子（導入）



図3 遠隔交流の様子



図1 準備の様子（教材作成）

3. 学生を対象とした事後アンケート

3-1. 内容・方法

交流後に学生を対象に事後アンケートを実施した。倫理的配慮として、事後アンケートの記述内容は、今後の授業改善を目的として研究対象となること、得られたデータは個人が特定されないように処理され、成績とは無関係であることを事前に説明した。また、研究の成果は、学会や論文等で公表される場合があることを伝え、同意と理解を得た。項目を以下に示す。

- (1) 遠隔交流時の発表の有無
- (2) 交流を通して、自身が保育を行う上で留意および工夫したい点（一人あたり3点）
- (3) (2)の内容は交流時の何を見て考えたり、感

じたりしたか（一人あたり3点）

3-2. 分析の方法

(1) 遠隔交流時の発表の有無：発表の有無について単純集計を行った。

(2) 保育を行う上での留意点、工夫したい点：記述を内容毎に分割し、筆者ら2名がKJ法によって分類した。そして、カテゴリー毎の回答者数を集計した。

(3) 交流時の何を見て考えたり感じたりしたのか（着眼点）：前述（2）と同様に分類し、集計を行った。

(4) 発表の有無による記述内容の差違：交流時間の関係で、園児の前での発表は、6グループ中4グループであった。発表した学生としなかった学生で、(2)(3)の記述内容に違いがあるかを検討するため、カテゴリー毎に χ^2 検定（期待度数が5未満の場合にはFisherの正確確率検定）を行った。

3-3. 結果・考察

事後アンケートの回答者は68名であった。

(1) 遠隔交流時の発表の有無

交流時にグループ発表を行った学生は42名、参加のみであった学生は26名であった。

(2) 保育を行う上で留意・工夫したい点

各カテゴリーに該当する記述を行った回答者数を表1に示す。分析は4段階まで実施したが、誌面の都合上、大中の項目及び回答者数、割合を示した。

表1より、保育を行う上で留意・工夫したい点に関する回答は、「働きかけ」「柔軟な対応」「保育者の心がけ」「幼児理解」の4つに大別された。

大項目の「働きかけ」では、声の大きさ、スピード、言葉遣いなど、子どもに伝わりやすい「話し方を工夫する」ことに関する記述をした者

が54名（79%）と最も多かった。次いで、表情や動作など表現を工夫し、子どもの「興味・関心を引き出す」ことに関する記述をした者が41名（60%）、静かに話を聞いたり、気持ちを上手に切り替えたりできるよう「子どもに気付きを促す」ことに関する記述をした者が14名（21%）であった。

大項目「柔軟な対応」としては、子どもの様子や周囲を見て話を進めるなど、「子どもの反応に応じて対応する」が26名（38%）、その場に応じた対応をするなど「臨機応変に対応する」が8名（12%）であった。

大項目「保育者の心がけ」としては、「笑顔で心がける」が7名（10%）、一緒に楽しむなど「雰囲気を作る」が6名（9%）、「自信をもって行動する」「あいさつを大切に」「安全に配慮する」が各々3名（4%）、元気に過ごすなど「健康に留意する」が1名（1%）であった。

大項目「幼児理解」としては、子どもの意見を聞くなど、「子どもの立場で考える」が10名（15%）、子どもを褒める、否定しないなど「子どもを認める」ことに関する記述をした者が4名（6%）であった。

実際の記述例を以下に示す。なお、（ ）内は中項目の見出しである。

【働きかけ】

- ・はっきりと分かりやすく伝える（話し方を工夫する）
- ・身振り手振りなどの動きは大きくする（興味・関心を引き出す）
- ・静かに話を聞けるように促す（子どもに気付きを促す）

【柔軟な対応】

- ・子どもの表情や、話を聞いているかなどをよく見て話を進める（子どもの反応に応じて対応する）

- ・その場の空気を読んで、遊びの内容を変えていく（臨機応変に対応する）

【保育者の心がけ】

- ・子どもたちの前で笑顔でいること（笑顔を心がける）
- ・歌を聴いている側も楽しむ（雰囲気を作る）
- ・恥ずかしがらず、ミスをしてもしっかりとやりきることが大切（自信をもって行動する）
- ・元気に子どもたちにあいさつをする（あいさつを大切にすること）
- ・ダンスをする時などに、周りに注意すること（安全に配慮すること）
- ・子どもたちに負けないように元気に過ごす（健康に留意すること）

【幼児理解】

- ・一緒に同じ立場に立って考える姿勢（子どもの立場で考える）
- ・子どもが考えたことを否定しない（子どもを認める）

このように、30分弱の交流の中で、固定カメラが捕らえている限定的な情景からであるが、学生が保育を行う上でどのような点に気を付けるべきか、具体的なスキルや保育者として必要な姿勢・配慮について多様な気づきを得ていることが示された。これらは、真下・小林（2023）における「交流を通して感じた保育者に必要な資質や保育者像」に関する調査結果と類似している。

表1 保育を行う上で留意・工夫したい点

大項目	中項目	発表有	割合 (対42名)	発表無	割合 (対26名)	p値	合計	割合 (全体)
働きかけ	話し方を工夫する	33	79%	21	81%	.828	54	79%
	興味・関心を引き出す	23	55%	18	69%	.236	41	60%
	子どもに気づきを促す	8	19%	6	23%	.690	14	21%
柔軟な対応	子どもの反応に応じて対応する	18	43%	8	31%	.319	26	38%
	臨機応変に対応する	5	12%	3	12%	1.000	8	12%
	笑顔を心がける	7	17%	0	0%	.038*	7	10%
保育者の心がけ	雰囲気を作る	3	7%	3	12%	.669	6	9%
	自信をもって行動する	1	2%	2	8%	.553	3	4%
	あいさつを大切にすること	3	7%	0	0%	.281	3	4%
	安全に配慮すること	2	5%	1	4%	1.000	3	4%
	健康に留意すること	1	2%	0	0%	1.000	1	1%
幼児理解	子どもの立場で考える	7	17%	3	12%	.730	10	15%
	子どもを認める	4	10%	0	0%	.290	4	6%

*p<.05

(3) 交流時の何を見て考え・感じたか
各カテゴリーに該当する記述を行った回答者数を表2に示す。分析は4段階まで実施したが、

誌面の都合上、大中の項目及び回答者数、割合を示した。

表2より、交流時の何を見て考え・感じたか

については、「子どもの活動」「保育者の活動」「学生の活動」「大学教員の活動」「オンライン交流の環境」の5つに大別された。

大項目「子どもの活動」としては、子どもの表現や予想内外の言動など「子どもの反応」にあたる記述をした者が34名(50%)であった。次いで、学生の問いかけに対する応答など、「子どもとの双方向のやりとり」については7名(10%)、園児の様子など「多様な子どもの姿」については4名(6%)であった。

大項目「保育者の活動」としては、保育者の必要に応じた言葉かけなど、「保育者の言葉かけ」については26名(38%)であった。次いで、保育者の補助的な説明や子どもに質問を促すなど、「遠隔上での保育者の補助的援助」については9名(13%)であった。保育者が子どもの思いを尊重するなど「保育者の関わり」については5名(7%)、ピアノの弾き方など「保育者の指導技術」についても5名(7%)であった。

大項目「学生の活動」としては、自身が発表した場面や他の学生の行動を見た時など「学生の働きかけ」に関しては32名(47%)であった。その他、大項目「大学教員の活動」としては、少数であるが、大学側での教員のサポートなど、「大学教員の行動」について、2名(3%)が記述していた。また、大項目「オンライン交流の環境」として、音声など「環境上のトラブル」について3名(4%)が記述していた。

実際の記述例を以下に示す。なお、()内は中項目の見出しである。

【子どもの活動】

- ・難しい言葉で問いかけると、子どもたちの反応が薄かったり、わからない顔をしたりしていた(子どもの反応)

- ・オンラインということもあり、声が届きにくい時があったが、ジェスチャーをすると意思疎通ができた(子どもとの双方向のやりとり)
- ・後ろの子どもたちも注目して欲しそうだった(多様な子どもの姿)

【保育者の活動】

- ・園児が分かるようにゆっくり話していた(保育者の言葉かけ)
- ・私たちの言葉が伝わりにくかった時に、子どもに伝わりやすい言葉で伝えていた(オンライン上での保育者の補助的援助)
- ・先生が褒めると嬉しそうに園児が照れていた(保育者の関わり)
- ・先生がピアノを弾きながら歌詞を言ったり、子どもたちの様子を見たりしていた(保育者の指導技術)

【学生の活動】

- ・最初にシルエットを出した時、画面上に小さく映っていた(学生の働きかけ)

【大学教員の活動】

- ・教員が「いいかな？」など、子どもたちの反応を感じながら進めていた(大学教員の行動)

【オンライン交流の環境】

- ・子どもたちの声が大きいのか、近すぎるのか、ノイズキャンセリングされてほとんど聞こえなかった時は、映像を見て判断するしかなかった(環境上のトラブル)

これらの結果より、学生が交流を通して、実に様々な場面をとらえており、それはスクリーン上の子どもや保育者のみならず、対面している学生同士や教員にも及んでいることが見て取れる。前述(2)の気付きや学びが何によってもたらされたのか、学生の観察における着眼点が明確になったと言えよう。

表2 交流時の何を見て考え・感じたか

大項目	中項目	発表有	割合 (対42名)	発表無	割合 (対26名)	p値	合計	割合 (全体)
子どもの活動	子どもの反応	21	50%	13	50%	1.000	34	50%
	子どもとの 双方向のやりとり	6	14%	1	4%	.238	7	10%
	多様な子どもの姿	3	7%	1	4%	1.000	4	6%
保育者の活動	保育者の言葉かけ	13	31%	13	50%	.116	26	38%
	オンライン上での 保育者の補助的援助	7	17%	2	8%	.465	9	13%
	保育者の関わり	4	10%	1	4%	.642	5	7%
	保育者の指導技術	4	10%	1	4%	.642	5	7%
学生の活動	学生の働きかけ	17	40%	15	58%	.167	32	47%
大学教員の活動	大学教員の行動	1	2%	1	4%	1.000	2	3%
オンライン交流の 環境	環境上のトラブル	0	0%	3	12%	.052	3	4%

(4) 発表の有無による記述内容の差違

発表の有無によって、(2) 保育を行う上で留意・工夫したい点、及び(3) 交流時の何を見て考え・感じたかに関する記述に違いがあるかを検討した結果、(2) の「保育者の心がけ」の中で、「笑顔で心がける」に該当する回答においてのみ、Fisher の正確確率検定で有意な差が認められ ($p=.038$)、発表した学生による回答が発表しなかった学生の回答よりも有意に多かった。これは、遠隔ではあるが園児と双方向にやりとりができ、相手の反応が即座に得られる状況において、笑顔で働きかける必要性を発表しなかった学生よりも強く感じたことによると推測できる。しかし、その他の各項目では有意な差は認められなかったことから、交流時に発表をしなかった学生にとっても、気づきや学びに大きな差は生じなかったと考えられる。

4. 幼稚園教諭への事後インタビュー

4-1. 内容・方法

遠隔交流での園児の反応を知り、今後の継続的な交流に向けて課題を明らかにするため、担

任教諭に対して、半構造化インタビューを行った。倫理的配慮として、インタビューへの協力は自由意思にもとづいていること、インタビューの内容は、個人が特定されないように処理され、授業改善を目的とした研究に活用されることを事前に説明した。また、研究の成果は、学会や論文等で公表される場合があることを伝え、同意と理解を得た。内容・方法を以下に示す。

(1) 対象

5歳児クラスの担任2名(勤務年数:4年、11年)

(2) 実施日時: 遠隔交流の2日後

(3) インタビューの内容:

- ①園児の反応、②遠隔交流時の課題、③継続的な交流に向けた要望

4-2. 結果・考察

インタビューの結果を項目毎に以下に示す。

①園児の反応

・交流時のクラス紹介のために掲示したドキュメンテーションを見て、園児が自分たちの体

験を振り返り、お互いに話をしたり、説明書きについて内容を尋ねたりするなど、興味をもっている様子がうかがえた。

- ・カメラによる中継は、園児にとって初めての経験であり、周囲に集まって興味津々であった。
- ・自由遊びから交流に移る段階で、学生に自分たちの良い姿を見てもらいたいという思いから、普段よりも素早く準備する様子が見られた。
- ・学生がダンスをする際に用いた手作りのお面に子どもたちが注目しており、視覚的に効果的であった。
- ・園児は交流を数日前からとても楽しみにしていた。

②遠隔交流時の課題

- ・音楽が聞こえにくい時があった。
- ・クイズは楽しめる内容であったが、5歳児には少し易しかったと思われる。子どもの発達段階や経験を考慮して工夫するとさらに良い。
- ・オンラインのため、学生の話が聞き取れない場面があった。
- ・〇×クイズでは、「マルか、バツか」という表現が子どもには分かり難く、保育者が補足説明することで理解できた様子であった。

③継続的な交流に向けた要望

- ・ダンスや歌を事前に共有できれば、普段の保育の中で踊ったり、歌ったりする機会を作り、交流時に一緒に楽しめるのではないかと。
- ・音楽が大きく聞こえるよう環境を整えられると良い。
- ・今回は交流をもてた2クラスが異なる園舎であったが、同じフロアの複数クラスが、それぞれ短期大学と交流を行えば、子どもたちがお互いの経験を伝え合うなど、活発なコミュニケーションが期待できる。

- ・学生と一緒に遊びたいと考えている子どもが多いため、対面での交流もあると良い。
- ・5歳児クラスだけではなく、他の年齢でも交流を行えると学生にとって学びが深まるのではないかと。

以上の結果より、園児が交流前から本実践に興味をもち、中継の時間までの準備や練習にも前向きであったこと、学生の発表が楽しめる内容であったことがうかがえた。一方で、学生から園児への言葉かけが十分に通じない場面が見られ、保育者が換言するサポートが必要であったことが報告された。これは、遠隔交流という環境上の問題だけでなく、学生が園児と関わる経験の浅さにもよると考える。また、園児の発達段階や興味・関心を吟味した内容・方法への改善や今後、対面交流と組み合わせた発展的な取組への期待も述べられた。

5. 今後の課題

本稿では、幼稚園教育実習の事前学習として、継続して実施している幼稚園と短期大学との遠隔交流を通じた学生の学びについて、学生への事後アンケートの結果、および幼稚園教諭を対象としたインタビューの結果を報告した。これらの結果より、DVD教材にはない子どもとの双方向のやりとりから、様々な気付きがあること、また、交流の中で、学生は様々な場面をとらえており、それは交流中の子どもや保育者のみならず、教室で対面している学生や教員の行動にも向けられていることが明らかになった。実習前の学生にとって、これは対面につながる有用な学びであり、今後はこれを実習指導にどう活かすかを検討する必要がある。

今後の継続的な取組としては、実践的な視点と研究的な視点が考えられる。まず、実践的な視点としては、遠隔交流で得られた気付きを、指

導案に盛り込み、対面の交流につなげることである。学生にとって、一度、遠隔で交流した子どもたちと対面でも交流する機会をもつことは、保育の立案や教材作成への大きなモチベーションになると考えられる。そして、対面交流での直接的な関わりを通して、実習につながる発展的な学びが期待できる。

次に、研究的な視点としては、遠隔交流の教育効果の実証が挙げられる。遠隔交流の前後で、指導案を作成し、各々に盛り込まれた内容と比較するなど、その変化を明らかにすることができれば、交流の有用性を実証することができる。しかし、これを実施するためには、15回の授業の中で、指導案作成指導と交流の時期をどのように位置づけるか等、授業の構成についても検討が必要である。

また、教育実習Ⅰ（1年生2月）の事後指導における振り返りでは、幼稚園教諭という仕事の難しさを実感するとともに、保育の実践や子どもとの関わりに必要な保育者の力が具体的となり、自身の身に付けるべき力を明確化している姿がうかがえる。実習前に遠隔交流を行うことが、学生の実習に対するモチベーションの維持のみならず、実習中の学びにどのような効果が

あるかについても検証する意義がある。このような観点から、検討を重ね、遠隔交流と対面での実践を組み合わせた効果的な実習指導の展開を考えていきたい。

付 記

本稿は、真下・小林（2024）の口頭発表を元に再構成してまとめたものである。

引用文献

- Jinyoung Kim (2020). Learning and Teaching Online During Covid-19: Experiences of Student Teachers in an Early Childhood Education Practicum, *International Journal of Early Childhood*, 52: 145-158.
- 川口めぐみ、徳岡大（2021）. 保育・教育系学生による5歳児とのオンライン交流活動の試み、高松大学・高松短期大学研究紀要、76、1-17.
- 岸誠一、姫野俊幸、溝田知茂、村井隆人（2021）. コロナ禍における小学校とのオンラインによる交流の試み－小学校教育基礎研究の授業を通して－、中国学園紀要、20、113-119.
- 真下知子、小林君江（2023）. 実習事前学習としてのオンライン交流を通じた学生の学び、京都文教短期大学研究紀要、62、59-65.
- 真下知子、小林君江（2024）. 幼稚園教育実習指導における遠隔交流の活用に関する検討、日本教育工学会2024年春季全国大会、627-628.